werden の意味に関する試論
—「要求」をてがかりに—

筒 井　友 弥

<Summary>

In this paper, I discuss the German auxiliary verb *werden* (Eng.: will, be going to). Especially I direct the attention toward the act of requests by the *werden* + infinitive-construction (*w*.+inf.), and find out the meaning and function of *werden*. Both the auxiliary verb use of *werden* and the main verb use of *werden* are still widely discussed among scholars.

I carry out a questionnaire about the scale of the requests by *w*.+inf, comparing it with other utterance types, and try to explain why the scale of the requests by *w*.+inf. is the strongest, although *werden* in *w*.+inf. actually expresses the inference by the speakers. Finally I suggest that the function "Perspektivierung" (Hacke 2009), which is semantically inherent in the auxiliary verb *werden*, underlies the requests by *w*.+inf..

1. はじめに [1)]

本稿では，ドイツ語の *werden* + Infinitiv（以下: *w*.+Inf.）の構造に注目し，特に，この構造における下記（1a-f）のような「要求」（Aufforderung）の用法に対象を絞る。この用法を分析することにより, *werden*（英: 本動詞＝become; 助動詞＝will, be going to）の意味・機能を探ることが目的である。結論として，助動詞 *werden* に意味的に付随する„Perspektivierung"（Hacke 2009）（展望化／視点操作（筒井による仮訳））という機能が, *w*.+Inf.による要求の根底にあると提案する。

(1) a. Du wirst dir die Hände waschen!（Vater 1975: 123）（手を洗いなさい）
b. Du wirst mit uns gehen!（ibid.）（私たちと一緒に来なさい）
c. Du wirst jetzt ins Bett gehen!（Duden [7]2006: 515）（今すぐ寝なさい）
d. Du wirst jetzt deine Hausaufgaben machen.（Amrhein 1996: 34）（今すぐ宿題をしなさい）
e. (Der Chef sagt:) Sie werden mir jetzt zuhören!（ibid.: 82）
（社長: 今は私の言うことをしっかり聞いてください）
f. (Lehrer den Schülern gegenüber) Ihr werdet nicht in die Stadt fahren.（Itayama 1993: 235）
（教師が生徒たちに: 町には行かないように）

2. 先行研究

一般に，ドイツ語の助動詞 *werden*（英: will, be going to）は未来の助動詞と言われる。しかし，単

純な未来の助動詞か，それとも話法的な要素を含んだ助動詞かについては，いまだ盛んに議論がなされている。その要因として，仮に未来時称を下記（2）のように定義した場合，例えば（3）におけるような比較から，「現在」あるいは「未来」を表す手段として，単純現在形（einfaches Präsens）でも *w.*+Inf.でも可能であることが挙げられる。

(2) ある事態 p の事象時（event time = E）が，時間軸上で，発話時（speech time = S）よりも後である（E nach S），あるいは部分的に重なる（E überlappt S）ような時間幅 [2)]

（cf. Reichenbach 1947; Bäuerle 1979; Hornstein 1990; Zifonun et al. 1997）

(3) a_1. Peter kommt **gerade**. vs. Peter <u>wird</u> **gerade** kommen. [Gegenwartsbezug]（Vater 1975: 83）

（Peter は**たった今**やって来る　対　Peter は**たった今**やって来る<u>だろう</u>）

a_2. Peter kommt **später**. vs. Peter <u>wird</u> **später** kommen. [Zukunfsbezug]（ibid.）

（Peter は**後で**やって来る　対　Peter は**後で**やって来る<u>だろう</u>）

b_1. Fritz arbeitet **gerade**. vs. Fritz <u>wird</u> **gerade** arbeiten. [Gegenwartsbezug]（ibid.: 89ff.）

（Fritz は**たった今**働いている　対　Fritz は**たった今**働いている<u>だろう</u>）

b_2. Fritz arbeitet **später**. vs. Fritz <u>wird</u> **später** arbeiten. [Zukunfsbezug]（ibid.）

（Fritz は**後で**働く　対　Fritz は**後で**働く<u>だろう</u>）　　（太字と下線は筒井による）

（3）からうかがえるとおり,「現在」あるいは「未来」を表現する手段として，ドイツ語では単純現在形（einfaches Präsens）でも *w.*+Inf.でも可能である。つまり, *werden* が必ずしも「未来」を表すわけではない。少なくとも,（$3a_1$, b_1）における *werden* は，明らかに「未来」と関係づけられていない（cf. Vater 1975: 92, 94）。こうした現在を表す場合の *w.*+Inf.の用法には，ある事態の真実性あるいは現実性に対する話し手の態度を表明し，表された事態の実現性を可能性として扱い，真実（直説法現在による叙述）でも非現実（接続法Ⅱ式による叙述）でもないことを示す機能があると考えられている（cf. Itayama 1993: 233, also Marschall 1987; Hacke 2009: 50f.）。このことを，Itayama（1993: 233）を参照し，単純現在形および接続法との比較においてスケールで表すと（4）のようになる。

(4) ↑ a. Sie ist im Büro.（彼女はオフィスにいる）

＝真実（断定）　<最も真実性／現実性／断定性が高い>

b. Sie wird im Büro sein.（彼女はオフィスにいるだろう）

＝実現可能（非断定）

c. Sie wäre gern im Büro.（彼女がオフィスにいてくれればなあ）

＝非現実（非断定）　　（矢印は度合いの高さを表す）

（4）に示すとおり, *werden* は, あくまで現実としてありうる／真実としてありうるという事態のあり方を表現し, これが, 話し手の「推量／推測」（Vermutung/Schlussfolgerung）の態度として反映する。この点で, 下記（5）に示すように, *werden* は, 話法助動詞の認識的用法（epistemische Verwendung）に極めて類似するといえる。

(5) a. Morgen wird/muss/dürfte/mag/kann es regnen.（Itayama 1993: 23）（明日は雨が降るだろう）
b. Sie wird/muss/dürfte/mag/kann im Büro sein.（ibid.）（彼女はオフィスにいるだろう）[3)]
（下線は筒井による）

以上の観点をふまえ, 先行研究における *w.*+Inf.の用法は, 主に 1）Voraussage（予告・予測）, 2）Aufforderung（要求）, 3）Absichtserklärung（意図の宣言）, 4）Vermutung（推量・推測）の四つに大別され, 1）, 2）, 3）は *futurisch*（未来的）, 4）は *gegenwartsbezogen-modal*（現在と関係した話法的）として分析される。冒頭で述べたとおり, 本稿の考察対象は,（1a-f）で挙げたような *w.*+Inf.による要求行為である。*w.*+Inf.によるこの用法は, 表（1）の塗潰し箇所からもわかるとおり, 先行研究において多くの文法書が認めるものであるが, その意味的な特性を詳細に分析したものは皆無に等しく, この用法における *werden* を詳細に分析することは, *w.*+Inf.による「要求」という用法の特性を明らかにするだけでなく, *w.*+Inf.における *werden* 自体の機能を探る手がかりになると考えるからである。

表（1） 先行研究における *w.*+Inf.の用法に関する分析

Verwendungs-weise（用法）／ **Grammatik**（文法書）	**1）Voraussage**（予告・予測）	**2）Aufforderung/ Befehl**（要求／命令）	**3）Absichtserklärung**（意図の宣言）	**4）Vermutung**（推量・推測）
Admoni（1982）	+	+		+
Behagel（1924）	+	+	+	+
Blatz（1896）	+	+		+
Dreyer/Schmitt（1991）				+
Duden（2005）	+	+	+	+
Eichler/Bünting（1996）	+	+	+	+
Engel（2004）	+	+		+
Erben（1980）	+	+	+	+
Flämig（1991）	+	+	+	+

Genzmer（1995）	+	+		+
Heidolph et al.（1981）	+	+	+	+
Heibig/Buscha（2002）	+	+	+	+
Jung（1990）	+	+	+	+
Sommerfaldt/Starke（1998）	+	+		+
Weinrich（2003）	+			+

（cf. Hacke 2009: 188）

3. 問題提起

本稿で取り上げる下記（6）（=（1）の一部再録）のような *w.*+Inf.による「要求」の用法には，ある問題が見受けられる。この際の要求では，その強制力の度合いが強いのはなぜかというものである。

(6) a. Du wirst dir die Hände waschen!（Vater 1975: 123）（手を洗いなさい）
b. Du wirst jetzt deine Hausaufgaben machen.（Amrhein 1996: 34）（今すぐ宿題をしなさい）
c. Du wirst jetzt ins Bett gehen!（Duden [7]2006: 515）（今すぐ寝なさい）

例えば下記（7）に挙げるとおり，多くの先行研究において，*w.*+Inf.による要求は強い要求・命令を表すと考えられている（cf. Jørgensen 1964, III: 56; Admoni 1966: 192; Vater 1975: 123; Itayama 1993; 235, Armhein 1996: 82 etc.）。

(7) Der mit Hilfe von *werden* bezeichnete Befehl ist nachdrücklicher und beharrender als der durch einen Imperativ ausgedrückte（Admoni nennt diese Variante von *werden* „eine sehr nachdrückliche Form des Befehlens“）. *Werden* ist in dieser Verwendung auch nachdrücklicher als *sollen*.（Vater 1975: 123）
（*werden* を用いて表された命令は，命令形で述べられた命令よりも，より強調され主張されたものとなる（Admoni は, *werden* によるこの文型を「極めて強調された命令の形式」と名付けている）。*werden* は，この用法においては, *sollen* を伴った要求よりも強い）

↑ Du **wirst** dir die Hände waschen.（手を洗いなさい）　<最も要求度が強い>
Du **sollst** dir die Hände waschen.（訳: 同上）
Wasch dir die Hände!　（訳: 同上）　（矢印は度合い強さを表す）

そこで筆者は，この点に注目して，ドイツ語の母語話者 9 名に対し口頭による簡易アンケートを行った。検証したのは，下記（8）に挙げる 4 組の比較文である。

(8) a_1. (Mutter zum Kind) **Mach** bis morgen deine Hausaufgaben fertig!

a_2. (Mutter zum Kind) Du **wirst** bis morgen deine Hausaufgaben fertig machen!

b_1. (Mutter zum Kind) Du **machst** bis morgen deine Hausaufgaben fertig!

b_2. (Mutter zum Kind) Du **wirst** bis morgen deine Hausaufgaben fertig machen!

c_1. (Mutter zum Kind) Du **musst** bis morgen deine Hausaufgaben fertig machen!

c_2. (Mutter zum Kind) Du **wirst** bis morgen deine Hausaufgaben fertig machen!

d_1. (Mutter zum Kind) Du **musst** bis morgen deine Hausaufgaben fertig machen!

d_2. (Mutter zum Kind) Du **machst** bis morgen deine Hausaufgaben fertig!

（8a-d）は，いずれも「（母親が子供に対して）明日までに宿題を終えなさい」という発話文に相当するが，実際その要求の度合いの捉え方に違いが見られた。まず，（$8a_1$）の単純現在形による命令文と，（$8a_2$）の *w.*+Inf.を伴う平叙文では，9 名の母語話者全員が，（$8a_2$）の発話文による要求の方が *stärker/strenger /nachdrücklicher*（強い／厳しい／強制的）と判断した。次に，（$8b_1$）の単純現在形による平叙文と，（$8b_2$）の *w.*+Inf.を伴う平叙文では，2 名が（$8b_1$）を，6 名が（$8b_2$）を *stärker/strenger/nachdrücklicher* と捉え，残り 1 名は等価と判断した。また，（$8c_1$）のような話者の確信を表す話法助動詞 *müssen*（英: must）を伴う単純現在形による平叙文と，（$8c_2$）の *w.*+Inf.を伴う平叙文では，9 名全員が（$8c_2$）を *stärker/strenger /nachdrücklicher* とみなした。最後に，（$8d_1$）の話法助動詞 *müssen* の単純現在形による平叙文と，（$8d_2$）の単純現在形による平叙文では，9 名全員が，（$8d_2$）の方が *stärker/strenger /nachdrücklicher* であると判断した。以上，要求の度合いに関する傾向的な結果をスケールでまとめると（9）になる。

(9) ↑ 1. Du **wirst** bis morgen deine Hausaufgaben fertig machen!　<最も要求度が強い>
　＝*w.*+Inf.を伴う平叙文

2. Du **machst** bis morgen deine Hausaufgaben fertig!
　＝単純現在形による平叙文

3. Du **musst** bis morgen deine Hausaufgaben fertig machen!
　＝話法助動詞 *müssen* を伴う単純現在形による平叙文

4. **Mach** bis morgen deine Hausaufgaben fertig!
　＝単純現在形による命令文　　（矢印は度合いの強さを表す）

ここで，*w.*+Inf.による要求の強制力の度合いが最も強くなるのはなぜかが問題となる。例えば Itayama（1993）は，主に 1 人称における *werden* が，しばしば話法助動詞 *wollen*（英: want to do sth./ be going to do sth.）で言い換え可能であることを手掛かりに，下記（10）の言い換えを検討したうえで，（10b）が意味的に非文となることから（11）のような *werden* の特性を導く。

(10) (Kommst du morgen mit zum Vortrag?)（明日の講演会，一緒に行くかい？）

a. Ich will schon, aber ich kann leider nicht.（もちろんそうしたいけど，残念ながら無理なんだ）

b. *Ich werde schon, aber ich kann leider nicht.（Itayama 1993: 234, also 板山 2008: 151ff.）

(11) *Wollen* weist bloß den Willen auf, den Vortrag anzuhören, während die *werden*- Fügung darüber hinaus eine hohe Realisierungsmöglichkeit mit zum Ausdruck bringt, i. a. W.: der Einsatz von *werden* setzt das *können* voraus.（ibid.）

（*wollen* は単なる望みを述べるにすぎないのに対し, *werden*-句は，自らの意志とさらにその行為に対する高い実現可能性を表現する。換言すると, *werden* の使用は *können* を前提とする）

このように *werden* が「高い実現可能性」を含意することに基づき，話し手は直接の聞き手に強い調子（dringlich）で行為の実行を要求する。このことから, *werden* による要求は命令形よりも要求の度合いが強い（cf. Itayama 1993: 235）。ここでは，この Itayama（1993）の見解の是非を問うことを目的としないが，仮に,「*werden* の高い実現可能性」というこの見解に従って先の問題を検討したとして，やはりその解決案としては納得がいかない。というのも,（先の（4）でも少し触れたが）本来，ある事態 p の叙述として，その実現に対する話し手の主観的蓋然性の度合い（スケール）は，下記（12）のようになると考えられており（cf. Vater 1975），真実性／現実性／断定性の度合いは, *w.*+Inf.を伴う表現より単純現在形による表現や話法助動詞 *müssen* を伴う表現の方が高い。にもかかわらず，単純現在形による要求や *müssen* を伴う要求よりも，*w.*+Inf.による要求の度合いの方が強いと判断される原因は何かという疑問に，理論的な解釈を与えることができないからである。

(12) ↑ 1. Es **regnet** draußen.（外は雨だ） <最も真実性／現実性／断定性が高い>

＝単純現在形による平叙文

2. Es **muss** draußen regnen.（外は雨に違いない）

＝話法助動詞 *müssen* を伴う単純現在形による平叙文

3. Es **wird** draußen regnen.（外は雨だろう）

＝*w.*+Inf.を伴う平叙文

4. Es **kann**/**dürfte** draußen regnen.（外は雨だろう）

＝話法助動詞 *können*（英: can）や *dürfen* の接続法（英: may の仮定法）を伴う平叙文

（矢印は度合いの高さを表す）

4. 解決案

前節の疑問に対する解決の手がかりとして，本節ではまず，未来的現在時制（futurisches Präsens）との比較を取り上げる。

下記の例文（13）に見て取れるように，未来的現在時制による「未来」の表現では時の添加語（下線部）が必要となる。なぜなら，時の添加語がない場合，「現在」読みの可能性を排除しないためである。

(13) a. Peter kommt <u>später</u>.（vgl. Peter wird kommen.）
（Peter は<u>後で</u>来る）（参照: Peter は来るだろう）
b. Sie tanzt <u>morgen</u>/<u>nächste Woche</u> in der Party.（vgl. Sie wird in der Party tanzen.）
（彼女は<u>明日</u>／<u>来週</u>パーティーで踊る）（参照: 彼女はパーティーで踊るだろう）

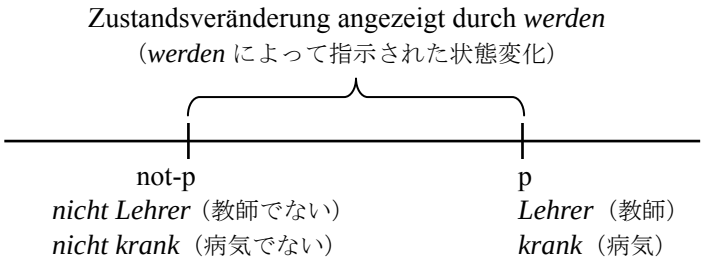
一方，（13）の「参照」で示すとおり，*w.*+Inf.による「未来」の表現では時の添加語が常に必要というわけではない。ただし，時の添加語がない場合，「推量」読みの可能性を排除しない。さらに，下記（14）からわかるとおり，*w.*+Inf.による「推量」の表現では，推量や確信を表す話法詞（下線部）との共起が可能である[4)]。

(14) a. Peter wird <u>wohl</u> gerade arbeiten.
（Peter は<u>たぶん</u>たった今働いているだろう）
b. Er wird <u>vermutlich</u>/<u>wahrscheinlich</u>/<u>sicherlich</u> im Garten sein.
（彼は<u>たぶん</u>／<u>おそらく</u>／<u>きっと</u>庭にいるだろう）

従って，これらの現象から，*w.*+Inf.の構造自体が，「未来」や「推量」の読みを独自に引き起こすのではないことが導かれる。また同時に，*w.*+Inf.の構造の弁別的特性は何かという問題が露呈する。この点に関して，Hacke（2009）は，未来的現在時制と *w.*+Inf.による未来表現との決定的な相違を，„Perspektivierung“（展望化／視点操作（筒井による仮訳））という機能に見い出す。そして，この機能の考察には，助動詞 *werden* の通時的な分析に言及する必要があるとし，助動詞としての *werden* の意味が，本動詞としての *werden* の意味からの派生（cf. Armhein 1996）である点に注目する。

下記の（15）の図で示すとおり，本動詞としての *werden*（英: become）の語意は，ある状態 nicht-p（not-p）からある状態 p への移行／変化であると捉えられる。

(15) 例: Paul wird Lehrer.（Peter は教師になる）／Paul wird krank.（Peter は病気になる）



（cf. Hacke 2009: 116）

ここで留意すべきは，本動詞 *werden* が用いられる文では，最終状態 p を想定したうえでの「nicht-p → p」という「状態 p への移行／変化自体（状態の発展）」に意味の力点が置かれることである。そして，この最終状態 p は，発話時点では，あくまでも話し手が想定する，真偽が確定しない見通された状態である[5)]。それに対して，助動詞 *werden* が用いられる文では，まず，通時的に見て，本動詞 *werden* の意味から派生する過程で，本来の *werden* の意味が薄れ（cf. Kotin 2003），不定形の本動詞が表す命題全体の意味を担う「状態 p を見通すこと／見通された状態 p 自体（状態の展望）」に意味の力点が置かれると考えられる。このことを図で表したのが（16）である（cf. Hacke 2009: 117）。

(16)

Werden	≫sich entwickeln≪ Zustandsveränderung ≫発展≪ 状態変化	Perspektive 展望	
Bedeutungs-komponenten（意味の構成要素）			
Satz（文）	Er（彼は教師になる）	wird	Lehrer.
***Werden* + Infinitiv**	~~≫sich entwickeln≪ Zustandsveränderung ≫発展≪ 状態変化~~	**Perspektive 展望**	
Bedeutungs-komponenten（意味の構成要素）			
Satz（文）	Er（彼は夏にイタリアに行くだろう）	wird	im Sommer nach Italien fahren.

以上の観点について，さらに未来的現在時制との相違を検討した場合，まず未来的現在時制では，単純現在の読みを避けるために，時間的に測定可能な時の添加語を用いて未来を表すものの，単純現在形を使用している限りにおいて，あくまでもそれは発話時点からの視点として「時間」の表現を行っていることになる（＝（17））（cf. Hacke 2009: 120ff.）。

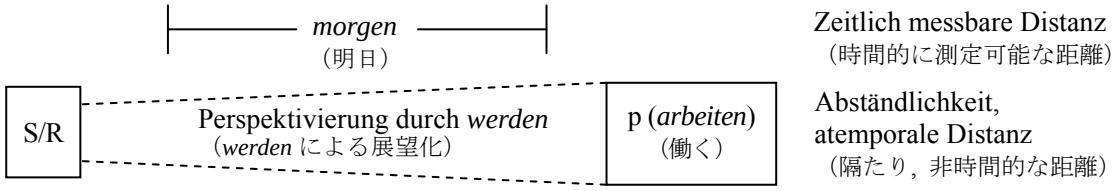
(17) Präsens + Temporalangaben: Sie **arbeitet** morgen.（現在形＋時の添加語: 彼女は明日働く）

morgen（明日）	Zeitlich messbare Distanz（時間的に測定可能な距離）
S/R[6)]	p (*arbeiten*)（働く） futurische Interpretation von p（p に関する未来の解釈）
	Nähe zum aktuellen Sprechzeitpunkt（現行の発話時点に対する近さ）

それに対して，*w.*+Inf.の文では，時間的に測定可能な距離（時の添加語による E nach S）と並行して，発話時／発話者と事態 p との関係に非時間的な距離[7)]が存在することを表すと考えられる（＝（18））（cf. ibid.）。というのも，そのような距離の存在が観察されないのであれば，端から未

来的現在時制で表現すれば良いためである。そして，この非時間的な距離というのが, *w.*+Inf.の使用によって話し手の表す主観的態度であり，助動詞 *werden* を意図的に用いて発話することで，文全体の意味の力点を動詞（句）の内容に置き，聞き手による文解釈の視点をその動詞（句）の表す内容へと促す機能があると考えられる。つまり，*w.*+Inf.による要求では，*werden* 自体が表す *Perspektivierung* という機能によって，文全体の意味の力点が動詞（句）の意味内容に促され，このことが，要求行為において，聞き手の解釈に心理的負担を及ぼすのではないかと結論づけられる。

(18) *werden* + Infinitiv: Sie **wird** morgen arbeiten.（*werden*＋不定形: 彼女は明日働く（だろう））



5. まとめに代えて

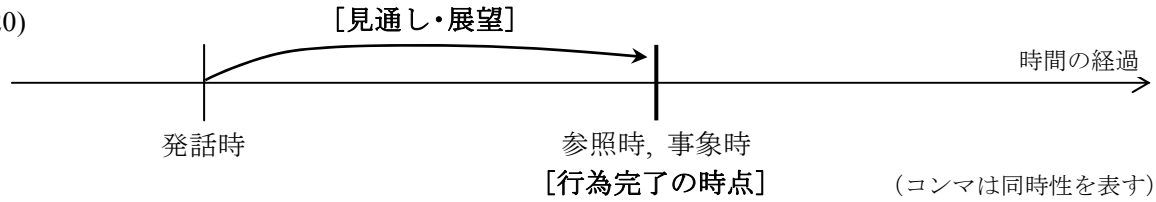
本試論は，現段階では一つの案にすぎない。しかし，本稿における分析を裏付ける例として，最後に未来完了（*werden* + Perfektinfinitiv = Futur Ⅱ）による要求を考えてみたい。

筆者は，先に挙げた 9 名の母語話者に，下記 (19) の文について，その要求度の強さを確認した。

(19) (Mutter zum Kind) Du **wirst** morgen deine Hausaufgaben fertig **gemacht haben**!
（（母親が子供に対して）明日には宿題を終えていなさい）
＝*w.*+Inf.を伴う平叙文（未来完了）

結果として，9 名のうち 7 名が，（19）の文は，第 3 節の（8）で扱ったすべての文よりも要求の度合いが強いと判断した（2 名は *w.*+Inf.と等価と判断）。さらに，その際に口頭で得たコメントとして，未来完了による要求では，大抵，「脅し」として機能するような制裁が意図された発話 ([...]! Sonst[...])（[...]! さもないと[...]）が後続すると述べられた [8]。その要因として，未来完了で表された文では，やはりその動詞（句）の内容に意味の力点が置かれるためではないかと考えられる。というのは，未来完了による要求では，「行為の実現完了」に文全体の意味の力点が置かれると考えられる。

(20)



つまり，（20）の図で示す通り，参照時における事象のあり方に発話の力点を置くことで，その完了した事態は避けられないものであるという聞き手の解釈を促すのではないか，そしてこのことは，上記の例で平たく言えば,「宿題をするか否か」という聞き手の意思表示を求めているのではなく,「やり終えた状態」を見通しているという話し手の有無を言わさない態度が反映することで，聞き手の意志（都合）は無視され，このことが聞き手に対する心理的な拘束の要因となるのではないかと解釈できる。

注

1）本稿は, 2009 年 7 月 25 日に行われた第 90 回広島独文学会研究発表会（於: 広島大学）, 2010 年 11 月 13 日の日本独文学会京都支部研究発表会（於: 同志社大学），ならびに 2011 年 1 月 29 日の京都外国語大学ドイツ語学科研究会第 11 回研究発表会（於: 京都外国語大学）における口頭発表に基づくものである。各所の発表に際して，多くの先生方ならびに院生の方々に多大なるご指摘とご助言をいただいた。また，本稿に記すアンケート調査（パイロットスタディ）に際して，計 9 名のドイツ語母語話者にご協力を仰いだ。以上の方々に対し，ここに謝意を表したい。

2）本定義における事態 p は，便宜上，時間の副詞（句）や時を指示する前置詞句を含まないものとする。

3）話法助動詞との意味的な違いは「推量」の度合いにある。

4)（14）の例文は，単純現在形でも表すことが可能であることにも留意されたい: „Peter ist wohl gerade arbeiten.“（Peter はたぶんたった今働いているだろう）／„Er ist vermutlich/wahrscheinlich/sicherlich im Garten.“（彼はたぶん／おそらく／きっと庭にいるだろう）。

5) *w.*+Inf.の用法は，未来に関する話し手の「予測／予告」である限りにおいて，その事態 p の真偽は発話時点では判定できないものの，発話時以降には確認できる（nicht verifizierbar, aber bestätigbar/Wahrheitsneutralität）旨の伝達であると解釈される（cf. Hacke 2009: 65）。

6)「S/R」とは，それぞれ *point of speech(speech time)*と *point of reference(reference time)*を指す。詳しくは Reichenbach（1947: 287ff.）を参照されたい。

7) この非時間的な距離を表す *Perspektivierung* という概念は，時間性（temporal）と話法性（modal）において中立的（neutral）であり，このことが„Er wird gerade im Garten sein.“（彼はたった今庭にいるだろう）のような現在時における推量や, „Hanna hat schon immer gewusst, dass ihr Kind sie einmal verlassen wird.“（Hanna は，彼女の子がいつか彼女を見捨てるだろうということをずっとわかっていた）といった過去の時点における話し手の推量までも表現を可能にすると考えられている（cf. Hacke 2009: 118）。

8) この点に関しては，例えば Armhein（1996: 81ff.）でも指摘されている。

参考文献

Admoni, W. *Der deutsche Sprachbau*. 2. Aufl. Izdatel 'stvo Prosveštšenie: Moskau, Leningrad. 1966.

Amrhein, J. *Die Semantik von* werden. Wissenschaftlicher Verlag: Trier. 1996.

Bäuerle, R. *Temporale Deixis temporale Frage.* Tübingen: Gunter Narr Verlag. 1979.

DUDEN *Die Grammatik*. Mannheim: Duden Verlag. [7]2006.

Fritz, T.A. *Wahr-Sagen. Futur, Modalität und Sprecherbezug im Deutschen.* (= Beiträge zur germanistischen Sprachwissenschaft, Band 16) Hamburg. 2000.

藤縄康弘「ドイツ語のアスペクト ―言語における視点化の力学についての方法論的考察―」『語学研究所論集』 第 15 号　2010. pp. 81-104.

Hacke, M. *Funktion und Bedeutung von* werden + *Infinitiv im Vergleich zum futurischen Präsens.* Heidelberg: Universitätsverlag Winter Heidelberg. 2009.

Hornstein, N. *As Time Goes By.* Cambridge: The MIT Press. 1990.

Itayama, M.: "*Werden* -modaler als die Modalverben!", In: *Deutsch als Fremdsprache*. Heft 4. 1993. pp. 233-237.

板山眞由美 「*werden* + Infinitiv 構文の意味と用法 ―その多義性の構造―」（三瓶裕文・成田節編『ドイツ語を考える ことばについての小論集』 三修社　2008. pp. 149-158.）

Janssen, T. "Die Hilfsverben *werden* (deutsch) und *zullen* (niederländisch): modal oder temporal?", in: Abraham, W./Janssen, T. (ed.) *Tempus – Aspekt – Modus. Die lexikalischen und grammatischen Formen in den germanischen Sprachen.* Tübingen: Gunter Narr Verlag. 1989. pp. 65-84.

Jørgensen, P. *Tysk Grammatik.*Ⅲ. København: Gads Forlag. 1964.

Kotin, M.L. *Die* werden-*Perspektive und die* werden-*Periphrasen im Deutschen*. Danziger Beiträge zur Germanistik, Band 6. Frankfurt/Main. 2003.

Marillier, J-F. "Zeitbezug, Bedeutung und pragmatische Leistung der Fügung >*wird* + INF<", in: Hervé, Q./Najar, M. (ed.) *Temporale Bedeutung, temporale Relationen.* Tügingen. 1997. pp. 93-108.

Marschall, M. "Das Futur in der gesprochenen deutschen Standardsprache und ein Tteilsystem der deutschen Verbform," Deutsche Sprache 2. 1987.

Reichenbach, H. *Elements of Symbolic Logic.* New York: The Macmillan company. 1947.

Saltveit, L. "Besitzt die deutsche Sprache ein Futur?", in: *Der Deutschunterricht* 12, Heft 5.1960. pp. 46-65.

Vater, H. "*Werden* als Modalverb", In: Calbert, J. P. / Vater, H. *Aspekte der Modalität.* Gunter Narr Verlag: Tübingen. 1975. pp. 73-148.

Vater, H. "Hat das Deutsche Futurtempora?", In: Vater, H. *Zu Tempus und Modus im Deutschen*. Wissenschaftlicher Verlag: Trier. 1997. pp. 53-69.

Zifonun, G./Hoffmann, L./Strecker, B. *Grammatik der deutschen Sprache.* Bd. 3. Berlin/New York: Walter de Gruyter. 1997.